

歴史
探訪

旧幕府艦隊の蝦夷地渡航を援けた

仙台藩士細谷十太夫

元東京商船大学
教授

橋本 進

一 戊辰戦争の勃発と江戸幕府の終焉

【戊辰戦争】

慶応3年10月14日（1867年11月9日）、第15代将軍徳川慶喜は朝廷に大政を奉還した。この大政奉還に功のあった坂本竜馬は11月15日京都の近江屋で暗殺された。

12月9日、京都御所の小御所で会議が開かれ王政復古の布達等が行われた。夕刻、再び小御所会議が開かれたが将軍徳川慶喜は排除され、天皇出席のもと朝廷首脳と新任の三職ら特定の親王・公卿・大名・藩士のみが参列した。席上、王政復古のクーデタを仕掛けた薩摩藩士大久保一蔵（利通）や公家岩倉具視ら武力倒幕派は徳川慶喜の辞官・納地を決定しようとしたが、土佐藩主山内豊信（号は容堂）や福井藩主松平慶永（号は春嶽）ら公議政体派は徳川慶喜の参内を要求し、両者の間に激論が交わされた。結局、将軍徳川慶喜に対して尾張名古屋藩主徳

川慶勝と松平慶永が降官・納地の周旋にあたることになったが、慶喜はこれを拒んで大坂城に退いた。

翌慶応4年元旦、慶喜は薩摩討伐の上表（臣下から天子に奉る文書）を起草し、翌2日会津・桑名藩兵を含む約1万5000人の幕府軍が進軍を開始し、3日夜に京都南郊の鳥羽・伏見で薩摩・長州両軍約4000人と衝突した。いわゆる戊辰戦争（戊辰の役ともいう）の勃発である。この戦役は「鳥羽伏見の戦」、「彰義隊の戦」（上野戦争）、「長岡藩・会津藩との戦」、「箱館戦争」に大別されるが、翌明治2年5月17日の箱館戦争で終結した。

なお、本稿の年月日は明治5年12月3日（太陽暦の採用）までは旧暦（ただし○内は西暦）、明治6年以降は新暦で示す。

【鳥羽伏見の戦】

京都南郊の鳥羽・伏見で衝突した両軍は、装

備で優る薩長軍が幕府軍を圧倒し、翌日には朝廷から「錦旗」を受けて「官軍」が成立、淀・津両藩の寝返りもあって、6日には幕府軍は敗走した。この戦で新政府における倒幕派の主導権が確立し、正月7日には徳川慶喜追討令が出て東征が開始された。東征大総督には有栖川宮熈仁親王が任命された。

当時、幕府は不穏な京坂の情勢に備えて開陽丸を旗艦とする富士山丸、蟠竜丸、翔鶴丸、順動丸の艦船5隻を摂津沖に派遣した。開陽丸船将（艦長）は榎本金次郎（武揚）、副長は澤太郎左衛門であった。軍艦奉行並矢田堀讃岐守（景蔵）も西下して榎本金次郎と行をとみにしていた。

幕府軍のあまりにも早い崩れ方に、将軍慶喜の身を案じた矢田堀と榎本は1月7日の早朝、部下数人と共に大坂城へ向かった。

一方、大坂城にいた将軍慶喜は鳥羽・伏見の

敗戦の報に接するや正月6日の深夜、密かに城の裏門を出て摂津沖の開陽丸に向かった。慶喜と釜次郎は行き違ったのである。そして、開陽丸に乗船したのは將軍慶喜だけではなく京都守護職・会津藩主松平容保、京都所司代・桑名藩主松平定敬、老中酒井雅樂守、板倉伊賀守、大目付戸川伊豆守、外国奉行山口駿河守の重臣達も一緒に、幕府側は京坂から総引き揚げとなっていた。

1月8日夜、開陽丸副長澤太郎左衛門は將軍慶喜の上意に従って船將榎本釜次郎不在のまま摂津沖を発して江戸へ向かった。

【江戸幕府の終焉】

15代將軍徳川慶喜、幕府重臣らに乗せた開陽丸は1月11日品川沖に到着し、將軍慶喜は江戸城に入った。2月9日、慶喜は恭順の意を表して江戸城を去り上野寛永寺内の大慈院に引きこもった。

征討軍（官軍）の計画した3月15日の江戸城総攻撃は、幕府陸軍総裁勝安房守（正月23日付）と征討軍参謀西郷吉之助の妥協案によって回避され、4月4日には東海道先鋒総督橋本実梁、副総督榎原前光以下、西郷吉之助、海江田武次、木梨精一郎ら60名が江戸城に入った。事実上の江戸城明け渡しである。

4月11日、海江田武次、木梨精一郎の両参謀は薩摩、長州、尾張、肥後、備前など7藩の兵

を率いて江戸城に入った。この日の明け方、徳川幕府最後の第15代將軍徳川慶喜は上野寛永寺内の大慈院を出て、水戸に向けてひっそりと発っていた。

徳川幕府はここに終焉した。

慶応4年4月29日に徳川家は田安亀之助（家達）が相続すること、5月24日には徳川家の移封処分が決定した。徳川亀之助（家達）は駿河国の府中（静岡）城主となり領地高70万石が下賜された。この領地高は駿河国とその余りは遠江、陸奥の両国を合わせた録高であった。

二 旧幕府艦隊の江戸湾脱走

慶応4年（1868）4月12日、反恭順派の総帥と目されていた旧幕府海軍副総裁榎本釜次郎は幕府軍艦の引き渡しを拒否し、軍艦8隻（開陽丸、回天丸、蟠竜丸、千代田形丸、観光丸、富士山丸、朝陽丸、翔鶴丸）と運送船5隻（咸臨丸、長鯨丸、神速丸、美加保丸、飛竜丸）の計13隻を率いて品川沖から館山に退去した。これを知った勝安房守は、4月16日単身館山に出向いて開陽丸の榎本を訪ね、総督府からのきつい達しを示して説得にあたった。

4月17日榎本は勝の勧告に従って全艦船を率いて再び品川沖に戻ってきた。

4月28日旧幕府側は勝の仲介により軍艦4隻（観光丸、富士山丸、朝陽丸、翔鶴丸）と運送

船飛竜丸の計5隻および長崎丸、大江丸、昇平丸、旭日丸といった中・小型の運送船も政府側に引き渡した。

旧幕府艦隊には軍艦4隻（開陽丸、回天丸、蟠竜丸、千代田形丸）と運送船4隻（咸臨丸、長鯨丸、神速丸、美加保丸）の計8隻の艦船が残った計算である。

7月17日江戸は東京と改称された。

8月19日夜、榎本釜次郎は旗艦開陽丸に搭乗し、旧幕府艦船8隻（開陽丸、蟠竜丸、回天丸、千代田形丸、長鯨丸、神速丸、咸臨丸、美加保丸―旧幕府艦隊一覽参照―）に脱走旗本あるいは各地の戦鬪で政府軍に敗れた者など総勢約2000人乗せて品川沖から蝦夷地に向けて密かに脱走した。開陽丸の船將は澤太郎左衛門、蒸気役一等（機関長）は小杉雅之進であった。

江戸湾脱走に際し、榎本は今回の脱走の目的を天下に公表するため『檄文』をつくった。その内容は新王政をたたえながらもその成り立ちに強藩―薩長―の私意がはたらいており、真の王政ではない。故にこの地を去り長く皇国のために基業を開き、皇国を万国と肩を並べるまでもっていくには、この一挙―江戸湾脱走―しかない…というものであった。

しかし、蝦夷地への脱走の道は決して平坦なものではなかった。房総沖で暴風に遭遇し美加保丸、咸臨丸を失い、開陽丸もマストと舵を破

旧幕府軍艦一覧

艦名(丸)	艦種	排水トン	長さ×幅(m)	馬力×基	帆装
開陽	木造プロペラ汽船	2,590	73.2×11.9	400×1	3 檣・シ ッ プ
蟠龍	木造プロペラ汽船	370	41.1× 6.7	128×1	3 檣・トップスルスクーナ
回天	木造外車汽船	1,678	45.7×11.0	400×1	2 檣・ブ リ ッ グ
千代田形	木造プロペラ汽船	138	29.6× 4.9	60×1	2 檣・トップスルスクーナ
長鯨	鉄製外車汽船	996	76.2×11.0	300×1	2 檣・トップスルスクーナ
神速	木造プロペラ汽船	250	39.6× 4.9	90×1	2 檣・トップスルスクーナ
咸臨丸	木造帆船	—	51.0× 7.3	—	3 檣・バ ー ク
美加保	木造帆船	800	53.0×10.0	—	3 檣・バ ー ク

〔注〕日本近世造船史（明治時代）・造船協会・昭和48年による

損するという悲運に見舞われた。

慶応4年9月8日慶応は明治と改元された。

三 仙台藩士細谷十太夫と開陽丸蒸気役一等 (機関長) 小杉雅之進との出会い

【仙台藩の動向】

慶応4年（1868）5月6日の奥羽越列藩同盟の成立によって、戊辰の戦局は大きく変わるかに見えたが、奥羽の関門である白河口の守備にあたっていた仙台藩、会津藩等の同盟軍が大敗を喫したことから、列藩同盟の戦争戦略は大きな痛手を蒙り、同盟は瓦解することになる。この誤算は、奥羽列藩が期待していた榎本釜次郎の旧幕府艦隊が、江戸湾から動く気配を見せなかったことに起因する。そのため、海軍力を持たない同盟軍は東北太平洋岸の制海権を完全に政府軍に奪われることになり、政府軍の平潟港上陸を許し、白河口方面への兵力の増強を容易にしまったのである。

同盟軍は白河口での敗戦以来、各方面の戦況も思わしくなく、同盟軍の結束もだんだんと乱れてきた。相馬中村藩が政府軍に内通しているらしいことから、仙台藩兵は中村城を通り越して国境の駒ヶ嶺まで退き、米沢藩兵も帰藩してしまった。

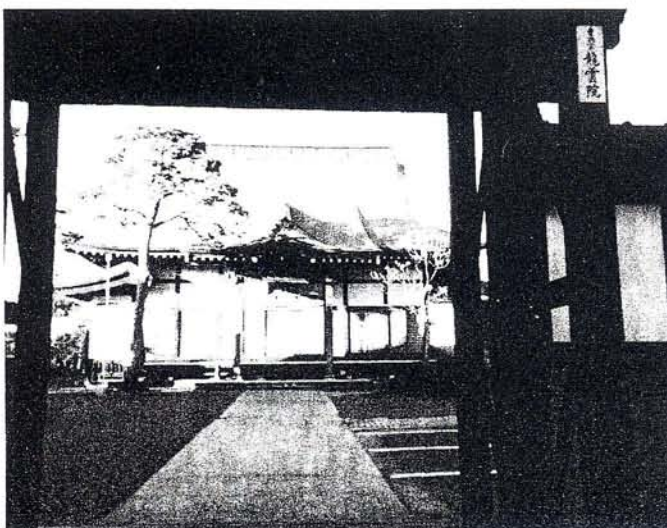
8月4日相馬中村藩は新政府軍に降伏した。国境の駒ヶ嶺で抵抗を続けていた仙台藩も、

8月の中旬に入ると敗色が濃くなり、藩内は降伏か抗戦かで藩論が二つに分かれている状態であった。

【仙台藩士細谷十太夫】

細谷十太夫について仙臺人名大辞書（仙臺人名辞書刊行会、宝文社、1981）は仙臺市内の龍雲院境内に建つ細谷十太夫顕彰碑の碑文を載せて次のように紹介している。

細谷直英、奇傑。十太夫と称す、鴉仙は其號なり、其先は伊達郡細谷村に住す、因りて氏とす、世々大番士に班して、禄五十石を食む、幼



曹洞宗 龍雲院（著者撮影）



細谷十太夫（鴉仙）の座像
（著者撮影）

にして父を喪ひ、母亦大婦し、零丁孤苦、備に
艱苦を嘗む、性豪放勇敢にして、膽氣人を圧す、
劍槍弓銃の諸芸に達し、尤も撫御の術に長ず、
其普請方役人となるや、常に私財を散じて人夫
を勞ふ、人皆悦服して功程他に倍す、戊辰の春、
命を受けて常野の間を視察す、既にして西軍と
戦ふに当たり、衝撃隊を組織し、大刀を佩用し、
服装皆黒色を用ふ、世呼びて鴉組と云ふ、戦ふ
毎に刀を揮ひて突撃すれば敵軍忽ち辟易す三十
餘戦悉く之に克つ、功を以て小姓組に進み、二
百石を下賜される、慶邦公、名を武一郎と賜ふ、
明治五年開拓使権少主典に任ぜられ、六年職を
磐前縣に奉じ、十年西南の役に従ひて陸軍少尉
に任ぜられ、各地に轉戦して驍名を博す、功を
以て勲六等に叙し旭日章を賜ふ、尋で宮城県五
等属となり、勤業事務に従ふ、十三年牡鹿郡大
街道開墾場長となる、十四年、龍駕北巡の際、
勅により有栖川宮殿下場に臨み、酒肴料を賜は

る、廿七年征清の役に軍夫千人長となり、満州
臺灣各地に抵り、功勞頗る多し、後ち西有穆山
禪師に従ひて僧となり、林子平の菩提所仙臺北
八番丁龍雲院に住し其荒廢を復興せんとして大
いに努力する所あり、志未だ果さずして明治四
十年五月六日示寂す、世壽六十三、龍雲院に葬
る。（碑文）

〔解説〕〔奇傑〕特に優れた人。〔大婦し〕別れ
ること。〔零丁〕おちぶれて孤独なさま。

〔撫御〕なだめ鎮めること。〔示寂〕高僧が死
ぬこと。

〔龍駕北巡〕明治天皇の東北御巡幸をさす。

〔林子平〕六無齋と号した。父は幕臣だったが
牢人となり、兄の仙台藩への出仕を機に仙台に
移り住んだ。天明5年（1785）に『三国通
覧図説』、翌年に『海国兵談』を著し、日本周
辺の状況と海防への世論の喚起をはかった。そ
のために、人心を惑わしたとして仙台塾居を命
じられ不遇のうちに寛政5年（1793）病没
した。高山彦九郎、蒲生君平とともに寛政の三
奇人といわれた。

ともあれ、細谷十太夫の最大の功績は、戊辰
戦争時に旧幕府艦隊を早期に仙台湾から退避さ
せ蝦夷地への渡航を援け、旧幕府軍・藩内佐幕
派と新政府軍との軋轢を回避して仙台・塩竈・
石巻の街を戦火から救ったことである（後述す

る）。なお、細谷十太夫には妻との間に長女な
ほ、長男十太郎、次男胞次郎、三男辰三の4人
の子供がいた。

【細谷十太夫と「烏組」の活躍】

「細谷がらすに十六ささげ なけりや官軍
高枕」

明治元年（慶応4年）戊辰戦争当時、白河口
の戦争にゲリラ戦を展開して大いに官軍を悩ま
した「烏組」（鴉組とも）隊長・仙台藩士細谷
十太夫の活躍と、棚倉藩（藩主阿部美作守、家
紋はささげ）を脱藩し、「誠心隊」を組織して
官軍と戦った16人の活躍を謡ったものであると
いう。



烏組の旗（幅1m余）
（石巻市毛利伸氏蔵）

細谷十太夫と烏組の活躍ぶりは、『郷土史事
典・宮城県』（佐々久・編、昌平社、1977）
に記述されているので、次に紹介する。

仙台藩士細谷十太夫は、福島の本松で、横浜と取引のある生糸商の手代となった。江戸探索のためである。すでに細谷は土方や女郎屋の妓夫太郎、刈田郡斎川名産孫太郎虫売りに姿を変え、米沢、荘内、水戸、会津などの諸藩に潜入、情報を逐次報告していたが、情報の正確さと度胸を買われた今度の任務は、しかし一日だけで終わった。

慶応四年五月一日の官軍と奥羽列藩同盟軍の最初の激戦で同盟軍は大敗、白河城は官軍に占拠された。敗報を聞いた細谷は、江戸探索など返上、須賀川に出て女郎屋の店先に、筆太の字で「仙台藩細谷十太夫本陣」と張り出し、親しい桑折の和三郎、掛田の善兵衛などの博徒を使い兵をつのった。五月三日から一五日までに五七名が応募した。細谷は彼らに黒装束、長脇差、槍を与え、一羽のカラスを染めた隊旗をつくり、「衝撃隊」と名乗った。人は「鳥組」とよんだ。細谷から「前進・退却の命令には従え、敵は銃隊、接近すれば勝つ」と訓示された鳥組が、敵と衝突したのは五月二一日で、以来七月二六日に新任務に着くまで白河口で戦うこと三〇数回であった。鳥組はつねに、白河城攻略にむかう仙台藩の先頭を進む。喧嘩なれした者たちは、敵に接近しては勇敢に斬りこむ。「薩摩芋掘野郎」「仙台味噌野郎」とたがいもののしりあう接戦になっても退却しない。猟師出身の隊員は

間道を走り、敵の後方に出て狙撃する。大砲一発ドンと鳴ると、鳥組は前進し、正規の仙台藩兵は指揮官増田繁幸を先頭に五里退却する。だから、仙台勢は「仙台のドン五里兵」と敵からも同盟軍からも嘲笑された。(以下略)。

(解説)「手代」(てだい) 江戸時代の商家では番頭と丁稚との中間に位する身分。

(妓夫太郎) (牛太郎とも) 遊女屋の若い者(使用人)

(孫太郎虫) (まごたろうむし) アミメカゲロウ目の昆虫ヘビトンボの幼虫。川底に住み、体長4〜5センチメートル、乾燥して疳の薬とする。

ところで、「ささげ」には「やっこささげ」「ささげ」「十六ささげ」の3種類があり、「十六ささげ」は莢の中に16箇の豆を持っているところからそう名付けられたという。棚倉藩主の家紋と誠心隊士16名を結びつけたものである。

また、江戸の武士の間では赤飯に「ささげ」を使用するという。これは「あずき」は煮ると皮が破れやすく、腹が切れる一切腹に通じるところから、煮ても皮が破れない「ささげ」を赤飯に使うという。

【幕府軍艦開陽丸蒸気役一等(機関長) 小杉雅之進】

小杉雅之進は父直方の三男として天保14年(1843) 10月1日に出生した。長男は早世したので次男の直吉が跡目を継いだ。

安政4年(1857) 9月、雅之進14歳(満年齢、以下同じ) のとき長崎海軍伝習所へ幕府伝習生第3期生として入所し、オランダ・ロッテルダム造船所から派遣されていた機関士官ハルデスのもとで蒸気理論・蒸気機関の運転法・機関修理の方法等を学んだ。

安政5年(1858) 4月23日幕府大老に就任した彦根藩主井伊直弼は、翌年5月18日長崎が遠隔の地であること、また、財政難であることを理由に長崎海軍伝習所を閉鎖した。

安政6年、江戸に帰った雅之進は幕府海軍士官に推挙され、築地講武所内に新設されていた海軍操練所に教授方手伝として出仕した。

幕府は安政5年にアメリカと締結した日米修好通商条約の本書を交換をするため、使節を米国ワシントンへ派遣することとなり正使新見豊前守正興、副使村垣淡路守範正、副使木村摂津守喜毅、監察小栗豊後守忠順らを任命し、木村摂津守を除く一行はアメリカ軍艦ポーハタンで出発することになった。

一方、幕府は使節の警護という名目で咸臨丸を米国サンフランシスコへ派遣することとし、

副使の軍艦奉行木村撰津守を乗船させ、船将に海軍操練所教授方頭取勝麟太郎を任命した。小杉雅之進も咸臨丸の蒸気方教授手伝として乗り組んだ。

咸臨丸は安政7年（万延元年）正月13日（1860年2月4日）品川沖を出航し、同年5月6日（6月24日）品川沖に帰航しその大任を果たした。帰朝後、雅之進は海軍操練所出仕となり、同年10月15日海軍操練所教授方出役を仰せ付けられ、海軍操練所教授となった。この間の3月3日、井伊大老は桜田門外で水戸・薩摩の浪士に暗殺された。

【小杉雅之進と榎本釜次郎の出会い】

慶応3年（1867）3月26日、幕府がかねてからオランダに発注していた開陽丸が横浜に到着した。開陽丸にはオランダに留学していた内田恒次郎、榎本釜次郎、澤太郎左衛門、田口俊平ら9名が乗船しており、彼らは文久2年（1862）6月18日江戸品川沖を発ってから4年9か月ぶりの帰国であった。

小杉雅之進は開陽丸乗組みを命じられた。榎本釜次郎との運命的な出会いである。

この年、24歳になった雅之進は美濃岐阜の大野弘の娘由と結婚した。

慶応4年（1868）正月、雅之進は軍艦蒸気役一等を仰せ付けられた。現代風に言えば開陽丸機関長である。雅之進25歳の冬であった。

四 旧幕府艦隊仙台湾に集結

【仙台沖】

旧幕府艦隊は銚子沖で強烈な暴風雨に遭遇し美加保丸と咸臨丸を失ったが、他艦は北上をつづけ、慶応4年8月24日から9月18日にかけて全艦船が「仙台沖」に到着した。

ここで、仙台沖とは広く仙台湾を指し、松島湾（寒風沢）、野蒜湾（東名浜沖）、石巻湾（石巻港、渡波港）、および荻浜湾（折浜沖）が含まれる（仙台湾図参照）。

なお、現在使用されている航海用海図の松島湾・寒風沢、野蒜湾、渡波港および荻浜付近を抜粋・掲載し、停泊場所の広さ、水深（メートル）等の参考に供した。

また、明治16年10月海軍省水路局刊行の海圖第百五十一號『日本中土東岸陸前松島灣附載野蒜及石濱泊地』（写、石巻市・本間英一氏提供、



小杉雅三・由 夫妻
（小杉伸一氏提供）

縦73×横103センチ）も参考のために掲載した。本図によれば寒風沢沖で水深4〜7尋（1尋＝1ファゾム約1・8メートル、7・2〜12・6メートル）、野蒜湾は「野蒜泊地」と記載され、船舶の停泊地であることを示し、水深も5〜6尋（9・0〜10・8メートル）ある。現在の海図との比較も興味深い

【開陽丸石巻に入港】

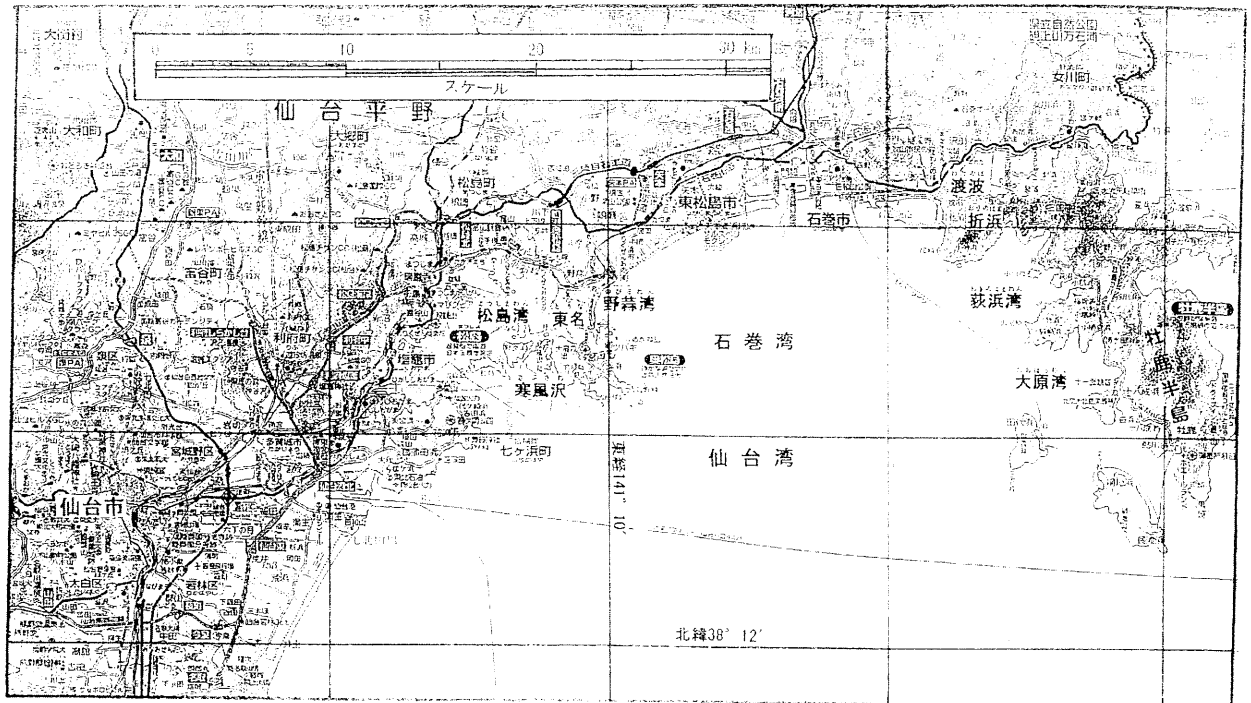
慶応4年8月24日長鯨丸（996トン、長さ46メートル）は仙台沖に到着した（『榎本武揚』加茂儀一、以下同じ）。長鯨丸の泊地は船の大きさ、泊地の広さ、水深等から寒風沢沖と思われる。

8月26日開陽丸（2590トン、長さ73メートル）はマストを折り、舵に損傷をうけながらも石巻に入港した。石巻港には多くの千石船が出入し、船大工も多いことから船体・舵の修理に適していると考えてのことであろう。

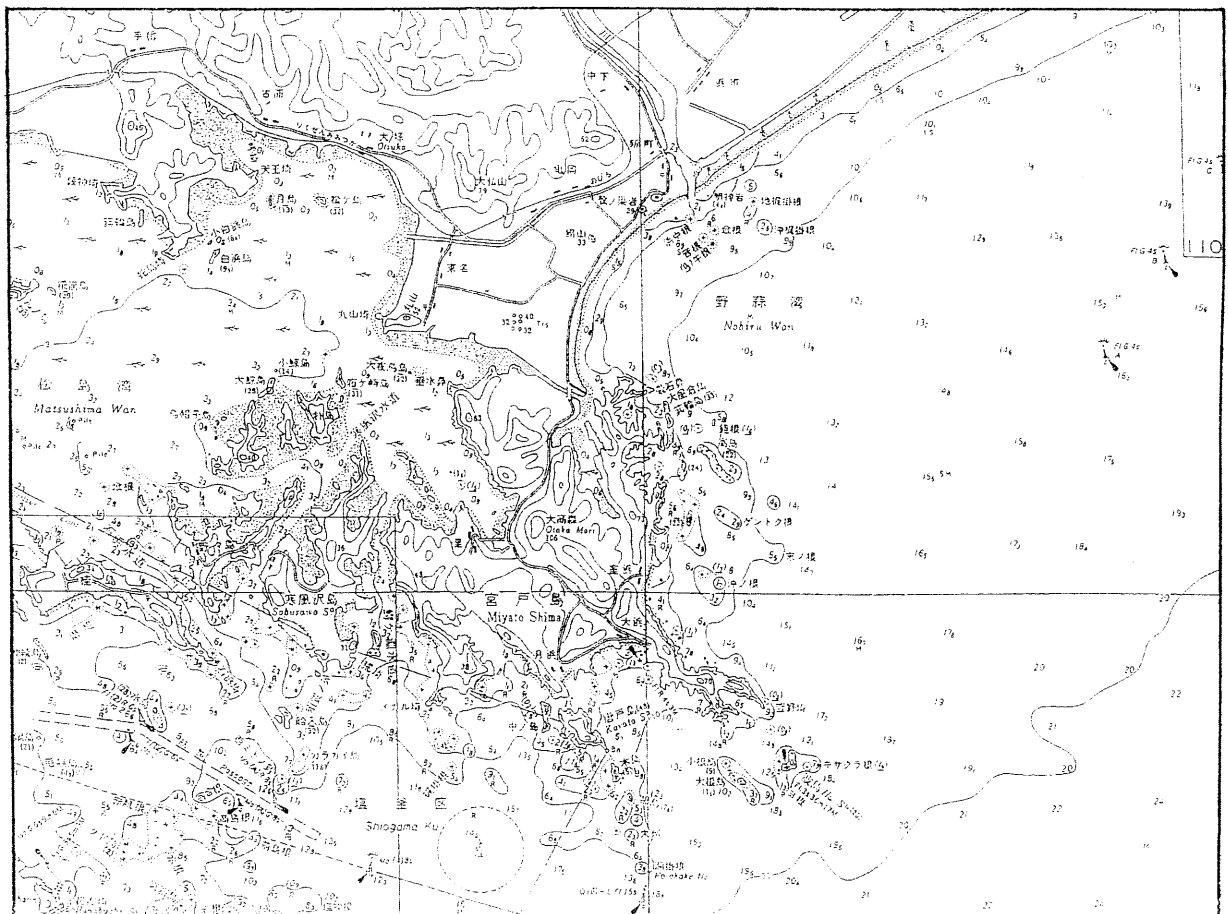
【細谷十太夫、開陽丸の連絡係となる】

榎本釜次郎はただちに仙台藩主伊達慶邦へ謁見を要請した。このとき仙台藩と開陽丸の連絡係になったのは藩主伊達慶邦に信任の厚かった細谷十太夫であった。

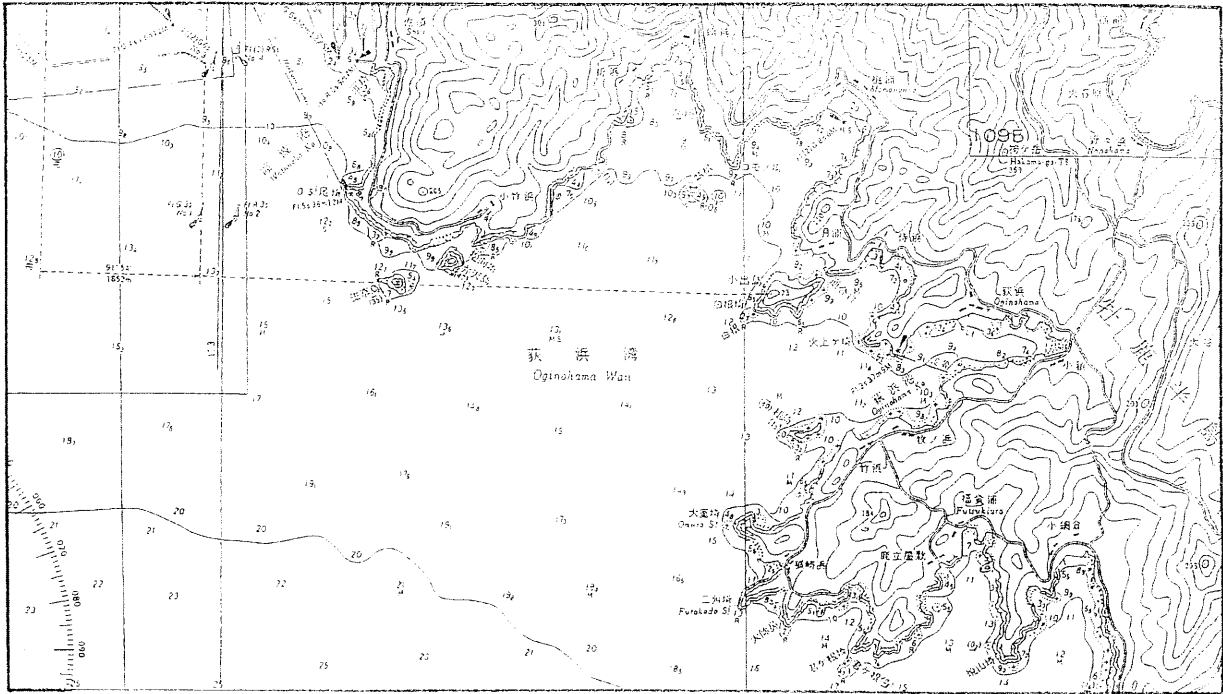
9月2日榎本は仙台青葉城で藩主に謁見し以後の軍議にも加わったが、この時には奥羽の戦局はすでに峠を越しており、榎本艦隊が入港したからといって大勢に影響を及ぼすことはほと



仙台湾（昭文社版「宮城県」による）



松島湾・寒風沢、野蒜湾付近（海図・海上保安庁水路部刊）



萩浜湾・渡波港および折浜付近 (海図・海上保安庁水路部刊)



日本中土東岸陸前松島湾附載野蒜及石濱泊地 (明治16年海軍省水路局刊行)

んど不可能に近かった。

仙台藩偵察方（藩主隠密か？）として、江戸をはじめ諸処へ探索に出掛けることの多かった細谷十太夫は、その後も秘かに城下国分町の榎本の宿所を訪れ政府軍との戦闘の状況、仙台藩の現況等の情報を逐一榎本らに流していたに違いない。

またその折、十太夫は仙台藩降伏後の身の処し方についても榎本らと話し合っていたと思われる。一つは、新政府の探索から徹底的に逃れること、もし捕らえられれば政府軍に敵対した鳥組隊長として処刑されることは明白だったからである。もう一つは、仙台付近に潜んで新政府軍の行動を監視し、その情報を箱館の榎本に知らせることであった。

【旧幕府艦隊全艦船、仙台湾に集結】

9月5日千代田形丸（138トン、長さ41メートル）と神速丸（250トン、長さ40メートル）が仙台湾に到着した。長鯨丸同様、寒風沢沖に停泊したと思われる。

9月8日「明治」と改元。9月10日には駒ヶ嶺で仙台軍と政府軍の最後の激突があった。同日、仙台中での審議は降伏を決定した。星俣太郎の率いるイギリス式編成の仙台藩最強部隊の「額兵隊」約1000名も、細谷十太夫率いる「衝撃隊」、別名「鳥組」の70余名も降伏を迎えた。

9月15日旧幕府艦隊は、仙台湾に貸与されていた大江丸（160トン）および鳳凰丸（130トン）を接收し艦隊に加えた。

9月18日回天丸（1678トン、長さ66メートル）、蟠竜丸（370トン、長さ41メートル）が仙台湾（東名浜沖と思われる）に停泊した。ここに旧幕府艦隊の全艦船が仙台湾に集結したのである。各艦はそれぞれの停泊地で船体の修理・整備に専念した。

【細谷十太夫、仙台・塩竈・石巻を戦火から救う】

9月19日、20日細谷十太夫は城下に滞在中の榎本らに「即刻城下を引き払うように」との君命を伝えるべく国分町にあった榎本の陣営に駆けつけたが、榎本らはすでに国分町を引き払い塩竈に向け出発したあとであった。その実、榎本は事前に十太夫からの連絡で仙台藩の降伏を知り、早々に城下を退散していたのである。

旧幕府軍と新撰組隊も仙台を引き払い松島方面に移動した。

9月20日榎本は庄内藩の援軍派遣の求めに応じて、石巻に停泊中の旧幕府軍艦長崎丸（341トン。本年5月に江戸から遊撃隊を乗せてきたもの）に兵70余名を乗せ、千代田形丸とともに酒田へ向かわせた。

9月26日新政府軍は仙台に進駐し、仙台藩兵とともに市中見回りを開始した。榎本は修理・

整備の終わった全艦船を松島湾の寒風沢沖と野蒜湾の東名浜沖に集合させた。

10月2日細谷十太夫は額兵隊を同道して石巻に到着、北上川東岸の湊村に宿営させて官軍との軋轢を回避した。仙台・塩竈・石巻の街を戦火から救ったのである。

10月4日陸軍隊・新撰組隊は石巻村本町と中町に、旧幕府軍は湊村に宿営した。

10月7日旧幕府艦隊は寒風沢と東名浜から石巻村東方の荻浜湾の折浜沖に移動した。

10月8日榎本が仙台湾に要請していた調達物資が折浜に到着、積み込みを始めた。

10月10日旧幕府軍は折浜に終結、衝鋒隊400名、額兵隊252名など約2300名が各艦に分乗した。

五 旧幕府艦隊、仙台湾を出航

【艦隊用物資の調達】

これより先、榎本は密かに仙台湾に対して米穀等の食料や生活用品の供給を要請していた。当時の仙台湾は打ち続く自然災害や戦乱のため、その要請を満たす財政的な余裕はなかった。しかし、仙台湾としては旧幕府艦隊が速やかに仙台湾を退去してくれるのが得策と考え、それらを提供することを決めた。

財政担当藩士の松倉恂はその経費捻出に苦慮を重ねたが、結局、これまでもしばしば急場を

救ってくれた石巻村の豪商毛利屋理兵衛に物資の調達と供与を懇請した。理兵衛はこれを応諾し、買い集めた物資は毛利邸の広大な庭先に集積し、理兵衛の手によって渡波まで陸送された。そこから折浜まで運ぶ段取りをつけたのは新撰組隊長の土方歳三であったという。調達物資の内容は『仙台戊辰史（復刻）』（藤原相之助、柏書房）によれば、

酒一斗入千樽、沢庵三百樽、味噌二百樽、荳油五十樽、胡麻油二百樽、塩百五十俵、梅干二百樽、鰯三万枚、仙台糯五十石、醬油五百樽、鯉節五百貫目、椎茸二百貫目、白砂糖三百貫目、鶏卵三萬粒、米千俵、大豆五十俵、焼パン百箱、番茶三百斤、酢三十樽、炭十萬俵、薪五萬本、椿油二十樽、上麻一千貫、十匁蠟燭三萬挺、白木綿五百反、白半切三萬枝、料紙三千枚、…等々48品目であった。

【仙台湾出航と便乗者】

榎本釜次郎は艦隊がこれ以上仙台湾に停泊することは、すでに降伏を決めた仙台藩に累が及ぶことを恐れ、早々にこの地を離れ北海道へ渡航することを決意した。

10月12日、旧幕府艦隊は石巻湾折浜沖を出航した。各艦船には桑名藩主松平定敬、備中松山藩主板倉勝静、唐津藩世子小笠原長行、前陸軍奉行竹中重固、前歩兵奉行松平太郎、伝習隊長大鳥圭介、衝鋒隊長古屋作左衛門、新撰組隊長

土方歳三、游撃隊長人見勝太郎らが分乗し、さらに、仙台藩額兵隊長星俣太郎をはじめとする仙台や会津の脱走兵も含め、一行の人数はおおよそ3500名余が乗船した。ほかに、石巻や渡波で徴発した運搬船（伝馬船）を積載し、その水主（漕ぎ手）も乗船させた。

六 それからの細谷十太夫と小杉雅之進

【仙台藩降伏後の細谷十太夫】

仙台藩降伏後、細谷十太夫は新政府の追求を逃れて仙台近郊を転々と隠れ住んだ。仙台藩には細谷十太夫のシンパ（支持者）が多かったのである。一方、十太夫はそれらのシンパの応援を得て新政府軍の情報に箱館へ流していた。

明治2年（1869）5月17日、戊辰戦争は終結した。

明治3年（1870）になると新政府は北海道開拓の目的で、仙台藩に日高国沙流郡を割り当てた。細谷直英（十太夫改め）はその出張員の一人として、同年2月秘かに北海道に渡った。その途中、直英は弘前の最勝院に小杉雅三（雅之進改め）を訪ね、この時に直英の三男辰三を小杉家へ養子に出すことを決めたと思われる。

このことは、後述する大正7年（1918）11月7日付の河北新報の、「…辰三氏は三歳の時、鳥組の隊長たる猛士十太夫の手から小杉家に呉

れられた人で…」の記事からもうかがえる。

明治5年（1872）1月6日、榎本釜次郎は出獄を赦され、3月7日には赦免された。3月8日新政府に仕官し、北海道開拓使として北海道に赴任した。榎本武揚の新しい船出である。この年、細谷直英は仙台藩の日高国沙流郡開拓地の出張員から北海道開拓使庁の吏員として採用された。おそらく榎本武揚の勧誘があったと思われる。

明治5年12月3日、政府は太陽暦を採用し新暦の明治6年1月1日とした。

明治10年（1877）2月15日西郷隆盛の決起により西南戦争が勃発したことを知った細谷直英は、3月に警視庁に転じて陸軍少尉となりこの戦役に従軍した。薩摩に対する積年の怨念が、元鳥組隊長細谷十太夫を九州の地に駆り立てたのであろう。

明治11年直英は宮城県属になったが、明治13年には官を辞して牡鹿郡大街道開墾場長となり開墾に従事して7年間を過ごした。

後年、細谷直英は僧となって鴉仙と号し林子平の菩提所龍雲院に住み、荒廃した寺の復興に尽力したが果たせず、明治40年（1907）5月6日63歳で没した。

【戊辰戦争終結と新政府の小杉雅之進に対する処分】

明治2年（1869）5月17日、旧幕府軍と

新政府軍による箱館戦争は旧幕府軍の全面降伏によってその幕を閉じた。

5月18日、江刺奉行並であった小杉雅之進は東京に送還されることはなかったが、「徐族」つまり士族の身分を剥奪されて津軽弘前の最勝院に幽閉された。

明治3年5月、雅三は徳川家とともに駿河国に移り沼津に住んでいた小杉家当主直吉に御預けの身となり、さらに服罪することとなった。雅三は妻由と養子辰三を沼津に呼び寄せたが、親類縁者の援助を受けざるを得ない苦しい生活であった。

明治4年、小杉家当主直吉は新政府に仕官し裁判官の道を選んだので一家は東京に住むことになった。御預けの身であった雅三も妻由と長男辰三を伴って東京へ居を移した。

明治5年3月6日雅三は赦免され戸籍も復帰した。しかし、士族への復帰ではなく平民であるところに新政府の厳しい姿勢がうかがえる。

雅三は特殊技術を生かして蒸気船の運転に従事し、兄の元を離れて独立した。妻由にまだ子は生まれなかった。

【服罪後の小杉雅三】

明治5年3月6日の小杉雅三に対する減刑措置は、服罪中の他の旧幕臣同様、雅三を新政府軍へ勧誘するための手段であったと思われるが、雅三はかたくなに拒み続けた。

榎本は最後まで自分と一緒に戦った小杉雅三ただ1人が節を曲げず、新政府への出仕を拒み続けていることに大きな責任を感じ、ことあるごとに新政府への仕官を勧めた。

明治7年(1874)1月18日榎本は海軍中将となり対ロシア北方領土問題処理のため特命全権公使を命じられた。同年8月、雅三は榎本の熱心な勧めに抗しきれず明治新政府に仕官し、新しく設置された内務省駅通寮に出仕した。海軍ではなく運輸を担当する駅通寮を選んだのは雅三の新政府に対する精いっぱい抵抗であった。

明治18年12月榎本武揚は通信大臣に就任した。小杉雅三は明治24年8月管船局船舶課長、同26年9月には大阪船舶司検所長となり同29年6月退官した。この間、通信省中堅官吏として明治29年3月の航海奨励法、造船奨励法、4月の船舶検査法、船舶職員法、海員懲戒法の成立に大きく貢献した。

退官後の雅三は、明治29年9月に大阪商船会社の監督部長に迎えられ、日清戦争後の海外発展の重要時期にあった会社の基礎をより強固に支えた。明治31年暮、会社を辞めた。

小杉雅三は、明治時代前期の日本海運興隆期にあって、その近代化を推し進める立役者として活躍したのである。

明治42年8月21日、小杉雅三は66年の波乱に

富んだ生涯を閉じた。法名は壽嶺院殿量遠日謙居士、兵庫県魚崎町の覺浄寺に葬られたが後に小杉家菩提寺の東京谷中の長昌山大雄寺に移された。

七 小杉辰三と龍雲院の復興

【小杉辰三と神戸製鋼所】

小杉辰三は仙台藩士細谷十太夫の三男として明治元年(1868)2月19日仙台で生まれた。3歳のとき小杉雅三の養子となり、長男として入籍した。

明治22年4月海軍兵学校(15期)を卒業、同期には広瀬武夫や岡田啓介がいた。広瀬武夫は日露戦争に出征、旅順港の閉塞作戦で戦死し「軍神広瀬中佐」として伝説化され国民的英雄となった。岡田啓介は海軍大將に昇進した。昭和9年(1934)首相になったが、昭和11年(1936)の二・二六事件に遭遇、難を逃れたが首相を辞した。

辰三は明治25年東京麻布の山田昌邦の長女光(光子)と結婚したが子に恵まれなかった。

明治36年(1903)海軍少技監(海軍造兵少佐)として呉工廠に勤務し製鋼事業に携わっていた。その頃、鈴木商店の小林清一郎に会い、将来躍進が期待される鉄鋼業の経営に乗り出すよう説得、辰三は企業計画が出来上がると呉工廠を退官してイギリスに渡りビッカース製鋼会

社において1年余の研究実習に従事した。翌37年暮れに帰国、小林製鋼所を設立して所長に就任し、工場は神戸東端の脇浜に建設した。

小林清一郎は製鋼業が容易な仕事ではなく、多年の技術訓練と巨額の資本を必要とすることを悟り、ついに操業1か月足らずで工場を身売りする決心をした。

鈴木商店は多額の融資をしていることもあってこれを引き受け、神戸製鋼所と改称して明治38年9月1日に新発足した。辰三は初代技師長として迎えられたが所長・田宮嘉右衛門と意見が合わず翌39年に辞職した。



小杉辰三（創立者初代技師長）
（神鋼三十年史より）

小杉辰三は発足後わずか1年で退所することになったが、彼の残した技術は神戸製鋼所の今日に至る基礎をなすものとして高く評価されている。

辰三の妻光は明治42年5月大連で病没した。

その3か月後に小杉雅三も死んだ。

【龍雲院の復興】

雅三の没後、辰三は亡父細谷直英が復興に尽力していた林子平の墓所のある龍雲院へ匿名で2万円を寄付した。このことについて、大正7年（1918）11月7日付の河北新報は次のように報じている。



河北新報（大正7年11月7日、8日?）

千古の偉傑林子平の墓所として餘に貧弱な龍雲院の境内に一月許り以前から頻りに手斧の音が響きわたり狭い堂宇の前には木材類が山積され十餘名の大工の姿が現るようになった。…（略）而してその新築費用一切は或る亡者の寄進だと傳へらるるのみで、堂守も大工も判然と

解らずに居る。…（略）記者は更に一人の感興を以て自ら亡者と称する此の奇特家の探索を始め、漸くこれだけの事実を突き止めた。それは境内左側に地藏として「宵越しの銭も持たずに眠りけり」なる辞世の句を背に刻んで祭られてある戊辰役の猛士晩年の鴉仙入道細谷十太夫の三男小杉辰三なる人が亡父の遺志を継いでの寄進と解った。

…（略）辰三氏寄進の二萬金は立派に或る株券で某氏に渡されてあるがそれが株式の騰貴で二萬金を超過しているとは益々面白い。

辰三氏は三歳の時、鳥組の隊長たる猛士十太夫の手から小杉家に呉れた人で…（中略）、亡父鴉仙翁（細谷十太夫）が龍雲院の荒廃を慨し再建を志して未だ果たさざるに逝いたその遺志を承けての寄進と解った。鴉仙翁の未亡人が今回の辰三氏の挙について、亡父が存命ならどんなに悦ぶ事だろう…と追懐したという話もある…。

亡父細谷直英の遺志を継いだ龍雲院の再建は大正8年4月に完成した。

昭和8年（1933）3月26日、辰三は65歳で波乱の人生を閉じた。法名は徳光院殿瑞嚴昇龍居士、大雄寺の小杉家の墓所に妻光とともに葬られている。

【参考文献】

- 日本近世造船史（明治時代）…造船協会編・1973
- 榎本武揚…加茂儀一、中公文庫、1998
- 開陽丸…（社）開陽丸青少年センター、現代ビューロー、1990
- 仙台戊辰史（復刻）…藤原相之助、柏書房、1968
- 鳥組隊長・細谷十太夫…櫻田憲章編、江北書屋、1931
- 土方歳三みちのく転戦（歴史と旅・「新撰組」）…橋本晶、秋田書店、1990
- 港町石巻にのこる戊辰の面影（歴史読本）…橋本晶、新人物往来社、1974
- 神鋼五十年史…株式会社神戸製鋼所、1954
- 咸臨丸還る―蒸気方小杉雅之進の軌跡―…橋本進、中央公論新社、2001
- 総覧『箱館戦争』須藤隆仙著論集第一巻…北海道史研究会、2006

▼ますます充実。海上保安業務、海事関係者はもちろんのこと、海を愛する人の手帳。

海上保安ダイアリー

【平成21年版】

好評発売中

潮汐、警備救難、水路、灯台等の知識や情報を収録。工作船や大陸棚に関するデータも記載。

海上保安ダイアリー編集委員会編
ポケット判 240頁 定価 1050円

世界一周游学クルーズ

▼航海中の船内の様子や寄港した地での歴史や文化を写真と共に紹介。

―2008飛鳥II航海日誌―

増田周作 著・写真

全ページカラー

- 七つの海を乗り越えて初めて見えてきた世界の今を活写！
- 豪華客船での遊びと学びについての深い考察。



四六判 250頁
定価 1890円



成山堂書店

〒160-0012 東京都新宿区南元町 4-51 成山堂ビル
PHONE:03-3357-5861 / FAX03-3357-5867

成山堂書店

検索